



第75号  
平成21年(2009)  
4月23日発行  
(年4回発行)

## 付けと転じ

### 青木秀樹

連句の入口は付けと転じであり、また連句の中核は付けと転じである。付けと転じの仕組みこそが連句を連句たらしめていると言ってもよい。「歌仙は三十六歩也。一步もあとに帰る心なし」(三冊子・白)が蕉風俳諧の基本ルールであり、現代の連句作品の大部分はその原則に則って創作されている。

何年連句をしていても、句座で付句を考えるたびに緊張感と楽しみを味わう。これが座の文芸、参加する文芸として連句にはまり込む要因であろう。集団で創作してゆく文芸だからこそその楽しみがある。

連句の付句を考案する方法について、支考は「前句からどのような趣向を立てるか」と「実際に句案を言葉として仕立てる」作業とに分けている。この「趣向」の段階で差合いをチェックすることにより時間を省き、「一

座の変化」を追求できると説いている。

私は初心の方には付句考案のプロセスを三段階に分けて説明している。

①前句を理解する

前句を読む↓句意を把握する↓打越句と前句との付筋を読み取る↓余情を感じる

②付句を発想する

付所を見定める↓趣向を案じる↓差合いをチェックする

③句作りをする

句材を選定する↓長句・短句に仕上げる↓句の体裁 障りをチェック↓提出

歌仙を四〜五時間で巻き上げる席では、捌が選定する時間もあるので、このプロセスを各人が三分から五分くらいでこなす。付合理論に基づいてあれこれ考案する時間はなく、連想や直感に頼ることになる。

二十名の連衆がいると(こんなことは普通でないが)出勝で付句を出すとはぼ二十通りの案が出る。皆が良いと思う案を提出するのに、どうしてこんなに違うのか。それが連句の自由な発想を許すところであり、絶対的な正解はない。前句への付け味、打越からの転じ、一巻の流れの中での序破急やメリハリ等からより良い句が選定され治定される。

絶対的に良い句はなくてもダメ句はある。

前句に付かない句、逆に前句に付き過ぎる句、前句の続きをいつている句、転じがなく観音開になっている句、意味不明な句、ひとが知

らない言葉を使う独りよがりな句、一句の中で二物衝突が起きている句などは、だれが捌でも、どのような場合でもダメである。

『連句年鑑』(平成二十年版)に「支考の付合理論に学ぶ―執中の法と空撓を中心に―」と題する評論が掲載されている。筆者は連句を研究対象としている永田英理氏(日本学術振興会特別研究員・博士)である。支考の「七名八体説」を解説した上で、「実際に自分が句を付けようとするときに用いようとすると、七名と八体とが脳内をぐるぐる回り出し、十何通りもの付け方を前にして混乱状態に陥ってしまふのである」とご自身の体験が記されている。連句実作において、付けと転じの方法として「執中の法」、いかなる方法論にも縛られない感性による自由な発想法として「空撓」を位置づけている。連句実作者の立場・視点からみて近ごろ稀な優れた評論である。ご一読をおすすめする。

ある程度キャリアを積み連句に自信が出てくるころに、すべての句に既視感を持ち、ユニークな句を出したがる傾向がある。詩情のあるオリジナリティーのある句を追求することは結構なことであるが、その際に往々にして基本を忘れてしまふ。連句は常に修練であり、これで良いというゴールまで到達できる人は稀である。苦しみながら、また楽しみながら連句に精進したいものである。

## 「の」の字が残った

東 明雅

連句会に出ても初心の間は、付けても付けても採用して貰えず、内心、残念・畜生と思いながら、表面はさり気なく一座された苦い経験は、多かれ少なかれ、きつと一度位は味わわれたことだと思ふ。

このような場合、捌き手も困るのであって、何とかして一句でもこの人の句を頂戴しようと努力するのだが、当人が馴れない悲しさ、焦れば焦るほど、とんでもない句ばかり付けて出される。他の熟達した人はうまい句を次から次へ、洪水のように出して来る。こうなると、捌き手は全く手をあげるより外はない。

こんな場合、捌き手の取る方法は二つある。一つは熟達した人が出された句を頂戴して、その初心者の方の名で記録する方法である。これは捌き手に取っても、貰う当人に取っても不本意であろうが、座の文学の特性から許される一つの便法である。もう一つは、初心者の人の句を徹底的に、原型を止めぬまでに添削し、あるいは作りかえて、とに角その人の句として出すという方法である。この場合、せめてその中に「の」の字が一つ位は残るだろうというところから、その初心者の嘆きをおもしろく、とに角、私の句は「の」の字が残ったというのである。

この言葉は、私が信大連句会に居た時、芦丈先生から習ったもので、東京に来て猫養会を作ったからも、しばしば用いているから、多くの皆さんにはお馴染みであろう。

芦丈先生の連句雑誌「山襖」第九号にはこの言葉の起源がちゃんと記録されている。

『鳳羽・浅水・菊外の三吟の百韻である。無論、鳳羽の捌きだ、菊外が下手だから、叱られ叱られ満尾した。この百韻の校合に朱を加へ加へして、真赤になって朱を加へる余地がないので、又浄書して朱を加へること三度、菊外云ふ俺の句は「の」の字が残った位のものである。この百韻が雨山編の連句總覽に載つて居るが立派な一巻である』

すこし註を加えるならば、鳳羽（一八四二〜一九一九）は本名森山茂。明治時代随一の大巨匠であった。浅水は峰岸浅水、菊外は菊守園二世として立机した猪爪菊外、気の毒であるが、彼の名はこの一語によって、後世まで語り草にされることだろう。

ここで最も留意しなければならぬのは、私どもはこの言葉を一座の捌きの上で専ら使っていたのであるが、捌きの場合はもちろんのこと、本来は一巻が完成してから、それを検討する校合の段階で用いられた言葉であるということである。

一巻が満尾しても、朱を加え、三度まで加えるということ、いかに古人がその作品を大切に、完璧を期したかということのあかしである。作れば一応検討し、校合はするもの、すぐ放り出してしまふ私などは本当に反省すべき言葉である。

連句になぜ捌きが必要かという疑問は、野球になぜ監督というものが必要かという疑問とよく似ています。連句と野球、それは余りにもかけ離れていると思ふ方もあるでしょうが、一方は集団でやる文芸であり、他方は集団で闘うスポーツという点に類似点があります。

連句は連中の出した句をすべて吟味して、式目に外れていないものの中から、打越・前

句との転じ・付味の最もすぐれたものを選んで、次の付句として治定します。そしてこのことを歌仙ならば三十数回繰り返すことによつて、一巻は首尾するのです。しかも、その選んだ一句は捌きの考えにより、自由に添削をして、極端な場合には、作者の名義を変更することも許される場合があります。これを行うのが捌きなのですが、何故、そんな権限が捌きに許されるのでしょうか。それは連句というものが集団の芸術であり、そのことが一座の個人それぞれの著作権に優先すると認められているからであります。

民主主義の時代、ことに自我意識の強い方には納得が行かぬところかも知れませんが、もし、捌きに一句も添削を許さぬという事になつたら、いかがでしょうか。捌きなしの一座、添削なしの作品が出来たら、それは奇蹟といふべきでありましょう。

野球の方も、全選手の中から九名を選んで出場者を決め、投手が不調であると見れば直ちに交替させ、三振ばかり続ける場合には代打を出し、時にはスクイズを命じ、球団が勝利を得る為には、あらゆる事を考えて、あらゆる命令を独断で下す。これが野球の監督というものであります。選手の中にはそのような采配に不平・不満を持つ人はいっぱい居ると思うのですが、皆それをじつと胸に納めているのは、いかに現代が民主主義の時代、個性尊重の時代であれ、野球・蹴球のような集団競技においては、選手個人の利害・都合よりも、集団の利害・都合が優先して当然だといふ社会通念が徹底しているからであります。

「ねごみの通信」第七号・第三十九号より転載

平成二十一年一月十八日

於ホテルフロラシオン青山

「歌留多かな」

上月淳子 捌

空札も恋の歌なる歌留多かな 淳子

初湯の匂ひふと身八口 美恵

河川敷ラジコン飛行機飛ばしゐて 和代

犬は喜び走り回りぬ 吉文

月昇り薩摩切子で乾杯す 佐紀子

おいどん好み古い籐椅子 恵

カフェテラス独り静かに文庫本 吉

きつと待人来るとおみくじ 恵

紫に山容遠く連なりて 代

夢を乗せゆく雲流れをり 吉

新顔の役者に拍手鳴り止まず 紀

小紋型紙父のお宝 代

花筏ときをり乱す鯉の泡 恵

利茶の席に混じる青い瞳 代

ナオみちのくの蘊旅の裾払ふ 同

出口調査のマイク突出し 紀

への字して人気下降の苦笑ひ 吉

凧吹けば不倫頭はる 恵

煮凝のやうに膠着俺お前

一つ覚えて一つ忘れる

ゴンドラに揺られゆられて海が見ゆ

キャンバスかかへ夜学生ゆく

三日の月地球を狙ふ異星人

穴惑ひにも似たる我が身か

ナウ老いたれど在宅医療に精出して

名画飾りし居間の広々

西行の得度の寺の花盛り

研ぐかみそりに踊る春光

連衆 山口美恵 長崎和代 永田吉文

間佐紀子

「汽笛一斉」

中村ふみ 捌

元朝の汽笛一斉鳴り渡る

波のかなたに美しき初空

世界地図拡げて夢を語るらん

菜園よりの幸を抱へて

ウ 大屋根に影のうまれて夏の霜

縁台将棋きそふ八ッつあん

ラブレター鉛筆なめて金釘流

同窓会の翌日も逢ふ

ゆつくりとつかずはなれず傘二つ

古寺巡礼の経を納めて

かけつけるボランテア多き派遣村

小鳥せつせと餌を啄む

花見船差手引手の危ふげに

幼稚園児の長閑なるうた

ナオ藩校は郷土の宝博物館

深煎珈琲ミルク少なめ

「地獄変」ナブキン葉に頁閉つ

消防自動車近づいてくる

佐助のひっそりと咲く路地の奥

やきもきばかり中年の恋

ステップを踏み違へてはしがみつ

ハドソン川に不時着の技

褐色の大統領は爽やかに

名月残し人は眠りぬ

ナウ公園に角伐りの鹿声ながし

古墳の丘の緩ぶ石積み

酌み交す丹塗りの盃に花吹雪

太極拳は陽炎の中

連衆 島村暁巳 須賀敬子 松本 碧

高塚 霞

「めでたや俳の」

鈴木美奈子 捌

ひんがしへめでたや俳の舟起 美奈子  
 お屠蘇機嫌で木遣ひとふし 佳之子  
 手拭に屋号大きく染め抜いて 守男  
 ロフトに並ぶ子どもらの顔 國光  
 甘藍のふくらみ育つ月に月 一枝  
 待たせるねえと藪蚊叩けば 奈  
 焦らされて軍の機密をうっかりと 之  
 ガラスのビルのドアはオペイク※ 枝  
 出勤は人目を避けて遠回り 光  
 焚火にあたる犬とご主人 守  
 泰西の名画に収まる良き市民 枝  
 アコーデオンを鳴らす街角 之  
 花びらのひた降りそそぐ踊の輪 光  
 女王蜂は時にまどろみ 守  
 ナオ伊勢参いつもの茶屋の串団子 枝  
 バイク突つ切るおかげ横町 之  
 狭いから風車発電遠慮がち 守  
 処世のこつは臨機応変 之  
 おかめ市香具師ぐうたらに米を研ぎ 守  
 トラベルチェックちびた鞆に 光  
 胸の谷トランクライザー効きませぬ 枝

眠らぬ闇に有明の鳥

海静が残る蛍の薄あかり

結のお返し切りたんぼ鍋

ナウ森伊蔵てふ酒をネットでゲットして

リズム正しく畑を打つ鋏

老懶の背に花びらのやはらかき

猫十二匹笑ふ山々

※オペイク…OPAQUE 不透明な・半透明な  
 の意

の意

連衆 染谷佳之子 近藤守男 飯塚國光

西田一枝

「たのもしき」

峯田政志 捌

たのもしき同志と交す御慶かな 政志  
 一気飲みする乾杯の屠蘇 有子  
 下町のレトロ電車に試乗して 良子  
 ハーブの鉢の並ぶブティック 冬乃  
 縁台に将棋指しをり夏の月 昭  
 ちよつと気になる汗のみみあげ 乃  
 大丈夫あたいが守ってあげるから 有

崖の上には馬頭観音

取材旅またもフィルム買ひたして

母も差出る茶の間劇場

幕あいに長き行列お手洗

ゆつくり角を曲るリムジン

蹴る石の総理に当たれ花の昼

春眠いまだ覚めぬままなり

ナオ種案山子蔵よりだせばのつべらぼう

伝写楽画の歪む大首

鞆には不渡り為替何枚も

炊き出し奉仕熱き葱汁

グラマーに尻をしかける色男

手練手管はかまととが上

取次の執事凜然笑みもせず

軒より糸を垂れる養虫

薄原しるがねに染め真夜の月

時代祭の準備をさをさ

ナウ出張中ジャンクメールの山と来て

舟の釣人鶴を見送る

友と行く南半球花の夢

平和な街に蟹気楼立つ

連衆 佐々木有子 本屋良子 百武冬乃  
 松原 昭

「七日粥」

佐古英子 捌

大倉山シャンツェ眺めて七日粥

英子

節東風を切り群れる雀ら

壽子

毬投げる子供の声の響きゐて

郁子

パスモ一枚入れるポケット

雅子

宵祭鎮守の森にのぼる月

實

浴衣の胸のふくらとして

同

友達はみんなイヤゴ僕の恋

壽

踏みはづしたる駅の階段

雅

President 変る亜米利加どう変る

郁

着水の飛機全員が無事

同

祝酒四斗樽どんと寄附をして

壽

人気復活寄席の鈴木

雅

花あびてあちらこちらに笑みこぼれ

壽

春の小川をジャズに編曲

同

ナオ一直線若駒消える牧の果

實

金字銀字の中尊寺経

同

ダイエツトカロリー計算念入りに

雅

何はともあれぐいっと熱燗

郁

枯蟻蟻釜ふり上げたまま木乃伊

雅

脱いで脱いでと言はれてもねえ

同

しつぱりと忍び逢ふのもいいじゃんか 實

豊作といふ北の故郷 郁

月の影田毎に映す千枚田 雅

歌枕訪ふ秋惜しむ人 壽

ナウ太公望魚籠いつぱいに夢つめて 雅

古稀を過ぎたるおだやかな今 郁

名も知れぬ里にひとと花万朶 英

若者集ひ謠うららか 實

連衆 杉山壽子 東 郁子 武井雅子

梅田 實

「傘齢の」

秋山志世子 捌

傘齢の牛歩楽しむ恵方かな 志世子

道の真中で出会ふ獅子舞 明子

折紙の舟を並べる児等のみて 恭子

クッキー焼けたキッチンの声 達子

夕月の紅く燃える夏の街 欣二

厚き胸板単衣着せかけ 明

どこいくの漢はいつも嘘をつく 恭

引き時ちゃんと知ってゐる猫 達

党派越え勉強会と宴会と 恭

領収書みな同じ字体で 明

マラソンの追ひつ追はれつゴールする 欣

噂聞くと下がる血圧 明

花びらの帯と流るる神田川 達

大家店子の炬塞ぎの頃 恭

ナオ夢いつぱいこのタラップの向かうには 明

イタリア中に響く名声 恭

歴代の伯爵の霊集ふ城 明

冬のりんごの置いてある書庫 達

ポーナスは出ればいいねと妻の笑み 恭

二人で居ればいつもハッピー 明

宝箱愛をくるんでそつと入れ 恭

穢土も浄土も鉦叩鳴く 達

乞はれては舞をひと差し月の宿 同

古酒をふるまふ故郷の友 恭

ナウ意志のみが煙草断つ身の覚悟なる 欣

痛いかゆいも生きる証に 恭

棲み馴れし苦屋をつつむ花明り 世

田螺甘めは伝統の味 執筆

連衆 野口明子 式田恭子 篠原達子

諏訪欣二

「頬ごやまじや」

生田目常義 捌

初東風の頬にやさしや青信号 常義  
 レトルトにした七種の粥 三実  
 管弦のアンサンブルの関連に 豊美  
 ゆったり坐る肘掛の椅子 路子  
 月明かり出航送る海猫の群 美代子  
 どこか遠くで響く雷 路  
 紫陽花をひと鉢抱へ訪ね来る 三  
 横恋慕するパンク少年 代  
 故郷に夫婦で作る千枚田 豊  
 村人は師村人は友 路  
 散歩道その日の気分で変へてみる 三  
 囁ちよつとやかましき森 豊  
 拳手の礼花に捧げて征きたりき 路  
 義士祭のため太刀を献納 豊  
 ナオしゃぼん玉大きな屋根を越えて飛び 同  
 小糸のぶなら少女小説 代  
 不時着で最後に降りるパイロット 三  
 柚子湯に浸かりひと息をつく 同  
 ねんねこに重くやはらか児の笑顔 代  
 かの思ひ出の闇マーケット 豊

ラブレター書いて販ぎし人もあり 路

熱き吐息の耳朶を打つ秋 同

胸の乳房押さへつ仰ぐ望の月 三

水は有料漸寒のころ 代

ナウ十四年はや阪神淡路大震災 路

うからやからの集ふお彼岸 代

花の宿盃めぐりまためぐる 義

猫の仔そつと渡る回廊 豊

連衆 滝沢三実 高橋豊美 倉本路子

山田美代子

「年立ちぬ」

青島ゆみを 捌

年立ちぬ戦火なき日のあらばこそ ゆみを  
 初東雲の彩れる峰 文子  
 広縁に植物図鑑ひろげぬて 士郎  
 フォトグラフィの目はレンズなり 洋子  
 鎮もれる川面を照らす夏の霜 文  
 小汗の中に息を吹きかけ を  
 絡みあふオルフェの肢体艶やかに 洋  
 衣桁に揺れる紅の腰紐 郎

逃げてゆく猫さへ情なさそうで を

バードストライク止めたヒーロー 文

一寸の先は闇の世神頼み 郎

今も夢見る白紙答案 洋

花爛漫アドバンテージ取るコート 文

あいつはまたも居なりでかかね を

ナオほころびも芥もつけて遍路道 洋

ゴビの沙漠に千の風あり 郎

オアシスにタンバリン打ち胡人舞ひ を

刀自は炬燵に正座崩さぬ 文

雪男雪崩の中に妻を呼ぶ 郎

アウトレットで掘りだしの恋 洋

御降嫁の姫宮も持つエコバッグ 文

亭主の好きな赤えぼしです を

望の月乱視で仰ぐ楕円形 洋

虫の音につれ呷るとぶろく 郎

ナウ故郷の山に向かへるおどろかし を

背伸びの幼な丸いポストに 文

バスケット溢れるランチ花の下 郎

点描画には香る芳春 洋

連衆 橘 文子 横井士郎 大島洋子

「明治の杜」

小池啓子 捌

ふかぶかと明治の杜の淑気かな 啓子

四方の春へと鴉舞ひ散る 了齋

佳器佳肴会談の席和やかに 千町

手品のごとく現れる人 葵

短夜の月の兎のくつきりと 要子

幼馴染の水着どぎまぎ 齋

体温も脈拍もまたびたと合ふ 町

巨大迷路の出口間近に 葵

宇宙からナスカに降りた訪問者 齋

用心ぶかく開く胸襟 要

政界の再編横目で睨みつつ 齋

書院造りの座敷牢あり 町

青銅の弥勒菩薩の花の笑み 葵

風船売りのかるやかな声 要

ナオ野遊びの泥つけて乗る新幹線 同

向き合って『ぬ、おぬし出来るな』 町

営業に多弁無用と教へられ 齋

寒暄に垂れる釣糸 葵

海老芋が寝そべてるる台所 町

猫に目撃された密会 齋

いにしへより妬きもちやきは鬼女となる 町

さやかに生きよと新宿の母 要

シェリー酒を透かせば月のややうるみ 町

初潮越えて西を向く船 齋

ナウ農園主老いて故国の流行歌 同

幼ら競ひ細螺数へる 要

しだれたる虚空に花のゆきかひて 啓

夢をたづねる駝蕩の日々 葵

連衆 鈴木了齋 原田千町 石川 葵

山本要子

「蒼穹や」

棚町未悠 捌

蒼穹や鳩消えゆける小正月 未悠

鉄入の音ひびく天地 央子

進水式船主は酒をふるまひて 秀樹

墨あざやかに届く札状 弘子

バルコニー銀盤の光ほしいまま 央

麻のドレスのジュリエット姫 悠

文豪の恋はいつでも青臭く 弘

好きになる人みんなB型 樹

ひとり旅リュックひとつにギター持ち 悠

ハドソン川に不時着の妙 央

株式は底値のままに張り付いて 樹

春の暖炉に悔恨も継ぐ 弘

樹木医の守り育てる花大樹 悠

梅若忌には子方活躍 央

ナオアンテナを伸ばしに伸ばし中継車 弘

地球の裏にブラジルはある 樹

こだはりは酔心田酒美少年 央

柳葉魚をあぶる白き手に惚れ 悠

令嬢に巾着切りの片思ひ 樹

奈落の隅で確かめる愛 弘

コラム欄老化防止に音読し 央

虫すだく中ゴルフ楽しむ 悠

静々と湖心を渡る望の月 弘

手彫りの鉢で新蕎麦の会 樹

ナウ生きているシーラカンスを見てみたい 悠

蟹気楼より抜けて来る人 央

山裾の神苑に花ふりそそぐ 樹

ゆったり歩む畦の耕牛 弘

連衆 遠藤央子 青木秀樹 松原弘子

「望正月」

林 鐵男 捌

望正月風のゆくへの卦を立てり

鐵男

窓の薄日に光るぼっぺん

泉子

ワークシエア交す挨拶にこやかに

久美子

社内ネットで用事済ませる

千恵子

ウ 漠北の地平線まで夏の霜

久

源氏螢もここまでは来ぬ

泉

男橋女橋経て出会ひ橋

惠

情がもつれてため息となる

久

雪洞にゆらめいてゐる影ふたつ

泉

隠れバレン信仰の里

惠

名物の味噌で勝負の町起し

久

勘亭流の文字の太々

惠

矯められぬままに満開花大樹

泉

完治間近きギプスうららかに

惠

ナオ 洪滞の高速和む春の虹

久

「る」の難しい子等のしりとり

惠

詐欺かしら電話勧誘うるさくて

久

にはか家族も派遣しまつせ

泉

水源の滴り樵の林から

久

遠く近くにボンゴ打つ音

泉

心臓の有処はつきり抱き合へば

久

語らずとても思ひ身に入む

泉

今年酒杜氏は出来を月に問ひ

惠

蔓たぐり終へ畑広々

久

ナウワイエスのテンペラ絵具透き通り

惠

葉がはりに挿む鉛筆

泉

訥弁のたくましい肩花を浴び

男

ゴルフアイアン磨くあたたか

久

連衆 青木泉子 副島久美子

鈴木千恵子

花の会 始末

篠原達子

私がACC連句講座へ入ったのは昭和六二年四月、理論||明雅先生 実作||秋元正江先生

生 教室ほほ満席。休まず行くうちに「伝道書」なるものを数人の方と共にいただいた。

そのお礼に銀座の酒亭「花車」に明雅先生をお迎えした。初夏快晴、恰も歌舞伎座の演し物は（織田信長）であった。

二十韻 薫風や 東 明雅 捌

薫風や下天は夢の大歌舞伎 明雅

柳茂りてかかる錦絵 好敏

ワープロ機打ちてゐる窓雀来て

淑子

おやつ分けあふ子供らの声

達子

ウ 宵えびす投ぐる小判に月光り

敏

冷き手と手抱きしめつつ

雅

どこからか見てゐるやうな夫の瞳

淑

パンダの前はいつも満員

同

ジェット機は一路故国へ流沙越え

達

まるごと齧る梨の齒ごたへ

敏

ナオ 月登る漸くすみし厨事

淑

えんま蟋蟀鳴きしきるなり

達

ベッドの灯消えてともしりてまた消えて

敏

こぼす涙で好き好きと書く

淑

思ひ出の遠き故郷よき時代

雅

還暦祝ひ届く活鯛

達

ナウこのところランバダダンス流行りゐて

同

初雷に逃げるロアピル

敏

花車居酒屋で巻く二十韻

淑

夕べとなれば囲む春の炉

達

平成二年五月十六日 於 銀座花車

以来年一回、処暑の日に連句会を持つことに。  
三回目だったか膝送り百韻を巻いた。場所は八丁堀、都の勤労福祉会館、宿泊室あり。

私は初めての百韻だったが正江先生のお陰で皆さんと同じく面白く楽しく夢中だった。何しろまだ暑い頃、ちよつとの隙にシャワー室へ駆け込みまた付ける。私はそれどころじゃ無い、何を食べたのやらお酒などなかったような、ただ懸命だった。終ったのが夜の十時過ぎ、「やっぱり泊ることに致しましょう」と正江先生、用意周到だったのである。翌朝好敏さんが牛乳やパンなど買出しに行ってくれたのを覚えている。

やがて正江先生が旅先で倒れられ、千雪さんが難しい病気に。志げ子さんが「花の会連句やれなくなつた、なんて口惜しいじゃない」と発破をかけ、(秋江や端正の月天元に)志げ子を発句に巻いた。先生の氏名を詠み込み回復を願う巻だった。千雪さんのも巻いた。しかしお二人は逝つてしまつた。志げ子さん「ゲストを頼みましょう」以来お一人お二人とお願いし回を重ねたが、先年その志げ子さんが思いもよらぬ医療ミスで他界、痛恨の極みと言ふべきか。花の会三人になつてしまつた。  
この会今年で十八年、これでお仕舞の巻を

巻いた。いつものゲスト二人をお願い、捌は好敏さん。ところが当日にわか欠席で、私が代りというお粗末だった。

『花の会』閉会

二十韻「ルネッサンスタワー」 達子 捌

ルネッサンスタワーに寄るや涼新た 篠原達子

広き窓より溢る月光 橘 文子

ひとところ赤米実る田のありて 金久保淑子

犬と人が車から出る 倉本路子

ウ 待ちぼうけケーキに珈琲三杯目 淑

君が開いたバンドラの箱 路

妖艶の美女もしかしてあやかしか 文

可愛いお臍夢に現る 同

打ち水も水鉄砲も路地暮らし 淑

一葉も来た坂の七つ屋 路

ナオ千巻の奉納めざす写経会 達

地酒ちびりと旅は楽しき 淑

あれば欲し僕らの恋のナビゲーター 路

抱きしひとは凍蝶の如 文

搔卷の長き接吻のぞく月 淑

城のお濠に丸き石橋 文

ナウセザンヌのピクトワール山眼前に 路

歌ふ雲雀に合はすコーラス 文

大障害紅顔の騎手花浴びて 達

友と別れを惜しむ弥生野 路

平成二十年八月二十二日 首尾

於 金久保宅(ルネッサンスタワー29階)

何の会でも始まりは苦勞のようだが、それより続けて行くのがタイヘンだ。連句の会は連句巻くだけとは言え、折り目節目どきには思い切つた催しも必要だし、新人獲得は必須である。

伝道書同期の「花の会」は新人加入なし、年一回の連句の幹事役など知れた事だけれど、六人が半分になつては何とも仕様がなない。

正江先生は美しいお人で才媛の言葉がびつたりの方、習つたことの幾つかが私の身の内にある。千雪さん志げ子さんも連句お上手い人だった。いっぱいお世話になつた。もう一度会いたいと熱々思う。

私が連句に出会つたのは六十過ぎだったけれど非常な幸運だつたと思う。超高齢になつてしまつたが、座の端に今少し置いてもらいたい願つている。ぐず連句だけれど。

## 西鶴とホトトギス

平林香織

今年、わたくしにとって、連句元年という記念すべき年となった。連句事始は、二〇〇八年九月。西鶴研究会の懇親会で鈴木千恵子さんと隣り合わせて連句談義に花が咲き、実作への憧れなどを酔いに任せてべらべらお話ししたところ、早速以前から研究会等で顔なじみだった二村文人さんにお声がけくださり、メール文音スタートの運びとなった。あれよあれよの展開で、ど素人のわたくしはおっかなびっくりだったが、お二人とも知る人ぞ知る連句の達人で、しかも、寛容と忍耐の精神に溢れていらつしやるから、手取り足取り楽しく連句の世界に誘っていただき、大変にありがたかった。

連句を巻きながら、付けによって、自分でも忘れていたような自分の身に起きた非日常的なできごとが忽然と想起され、ここでこそその体験を表現したいという衝動が内面から突き上げてくることしばしばあった。面白いことに、その誰にも明かさぬ実感の句は、次に治定される確立が高かった。自分以外に知る由もないできごとが場に浮上する不思議偶然が必然に転化する瞬間は、神の摂理を垣間見たような至福のときのようにさえ思えた。ところで、長年西鶴を読み続けてきたが、実作を行ってみて、改めて、二十四時間で、やれ千六百句だの四千句だの、果ては二万三千五百句などことばを紡ぎだしていくそのエネルギーは、いったいどこから来るのだろう

うかと気の遠くなるような思いがしている。木村三四吾氏がかつて「俳諧の魔神に憑かれた若き日の西鶴の異状な精神」（『国語国文』昭二十三・七）と言われたように、よどみないテンポで一昼夜ことばを放出し続けることよってある種法悦めいた境地がもたらされるのかもしれない。

西鶴の矢数俳諧のきつかけとなったのが、『俳諧独吟一日千句』（一六七五）である。最愛の妻を亡くした直後に読まれた一千の独吟。山下一海氏が、「独吟に熱中すること以外に、その悲しみをのりこえる方法はなかった」としつつ、「愛妻追悼という個人的感情が出版という形をとっていること」の意味が大きいと述べ（『西鶴物語』昭和五十二・十二）、谷脇理史氏も、「妻の死を率直に嘆き、それを公開することをためらわぬ西鶴、そこには、成長期にある大阪町人のエネルギーを体した人間の、まさに自在な姿が浮かび上がっている」と指摘している（『西鶴研究論攷』昭五十六・十）。また、暉峻康隆氏は、「独吟一日千句」こそは、矢数俳諧の創始者たるべき彼の素質の、最初の主體的な表現として、注目にあたいたいするものであり、「亡き愛妻に對するたえがたいまでの傷心」という「人間的な鬱屈した情感」のハケ口として「自然発生的に成立した矢数俳諧の原初形態」だと指摘している（『西鶴新論』昭五十六・十）。各氏が述べているように、悲しみの受容のスタイルとして西鶴が独吟千句というかたちを選んだことは、西鶴の愛の深さと、文学的資質を如実に物語るものにほかならない。わたくしがかねて興味深く思っていたのは、

『俳諧独吟一日千句』の百韻十組のすべての発句が「ほととぎす」を詠み込んでいることである。

以下列挙してみよう。

脈のあがる手を合てよ無常鳥

引導や甘五を夢まぼろ子規

郭公かかさがさりのかたちはいかに

郭公声や帆にあげて船後光

後世は大事間はづすなよ郭公

お時の鳥生死の海や二つ菜

頼みけり我誓願寺郭公

初の内一本尊作るや田長鳥

百八の数珠を懸たか郭公

一日に千体仏よ郭公

繰り返し呼びかけられるホトトギス。無常鳥、子規、時鳥、郭公、田長鳥、とあらゆる表記を駆使し、手を合わす、夢まぼろし、さとり、船後光、後世、大事、生死の海、誓願寺、本尊、数珠、千体仏という仏教的用語を取り合わせることによって、妻の成仏への切実な祈りと声無き妻への痛切な呼びかけが表現されている。ホトトギスは、ここでは、亡き妻の象徴ともいえる。

よく知られている西鶴のホトトギス句に「心爰になきか鳴ぬか郭公」（『遠近集』一六六六）「軽口にまかせてなけよほととぎす」（『大坂独吟集』一六七五）があり、二句並べてみると、ときに西鶴が、あの独特の鳴き声を吟行のメタファーとして用いているようにも思える。あたかもホトトギスによって自己表現を促されているかのごときである。

そういう意味でも、『俳諧独吟一日千句』におけるホトトギスは、愛の喪失の自己表現に

いかにもふさわしい。しかも、いうまでもなくホトトギスは亡き人へのメッセージを運ぶ鳥として古来和歌世界に君臨してきた鳥である。

亡き人を偲ぶよすがとしてもホトトギスのイメージとして、すぐに連想されるのは『和泉式部日記』の冒頭部分である。かつての恋人である故宮の一周忌を迎えて物思いにふけている和泉式部のもとに、その弟宮である帥宮のもとから橘の枝が届けられる。そこに込められた「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」という共通の故人への思いと、和泉式部にさぐりをいれる帥宮の心情を推し量った和泉式部が帥宮に詠みかけた歌は次の通りである。

かをる香によそふるよるはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると  
打てば響くように返された帥宮の歌

おなじ枝に鳴きつつをりしほととぎす声はかはらぬものと知らずや

以後、二人の歌のやりとり、そして、恋愛が展開していく。橘を宿りとする初夏のホトトギスはさながら愛のメッセンジャーといった面持ちである。兄弟だから「同じ声」をしていますよという帥宮のメッセージが、亡き恋人の声をもう一度聞きたいという女心をくすぐるのだが、やがて、和泉式部は、自分が弟宮を純粹に好きなのか、そこに故宮の佛を重ねているだけなのかと懊悩するようになる。

西鶴は浮世草子である『懷硯』（一六八七）に様々な夫婦像を描いているが、巻五の一「佛の似せ男」は、行方不明になった夫與太夫のニセモノである小平太を、恐らくはそれと知

りつつ「帰ってきた夫」として遇する妻の話である。『懷硯』は半僧半俗の旅人伴山の見聞集という体裁の作品であるが、偽夫事件について伴山が話を聞く宿の場所が、事件の起きた落水村近隣の「橘村」という設定になっている。橘村は架空の地名であり、「橘」の縁語として「ほととぎすの田舎ごゑさへめづらしく」という表現が、まさに連句的発想によつて付されている。そして、ニセモノが行方不明の與太夫になりすますきっかけが、そつくりな声なのである。そこには、橘—ほととぎす—同じ声という、『和泉式部日記』冒頭と共通のコードを読み取ることができる。一人の女と二人のそつくりな男、という設定はいかにも波乱含みであり、西鶴が得意とする「世の人ごころ」探求にはもってこいである。

「ホンゾンカケタカ」「カエルニシカズ（不帰如）」「カジフジユク（過時不熟）」などなど、何か意味ありげなことばにも聞きなされてきた鳴き声は、冥界のメッセージともいえるようなニュアンスを持つ。夕暮れや明け方等の薄暮の時間に鳴くという点も、神秘的でもあり抒情的でもある。ホトトギスは、失った愛する人のイメージを重ねて呼びかけるに相応しい鳥であり、圧倒的な存在感をもって逢魔が時のしじまを仕切る鳥といえよう。

ところで『近代艶隠者』（一六八六）序文に西鶴はおもしろいことを書いています。時雨の降る冬の夜「折ふし時鳥の九声して。夏かとおもうほどに飛鳴を。是ぞ詩哥の種にして。前代聞も及ざる事」とびつくりしている。「世の中をおもふに。何かめづらしからず」「人

ながら人程替りたるものはなし」と続くから、世の中は不思議に満ち溢れていて、ことさら人間ほど不思議なものはないという文脈における冬のホトトギスの登場であることがわかる。ホトトギスの鳴き声というのはそれだけでなく印象が強いが、季節はずれにそれが「九声」聞えるとなると、強烈なインパクトがある。冬のホトトギスの鳴き声を、西鶴が実際に聞いたのかどうかはさておき、ここでは、それが、橘泉が原稿を携えて突然西鶴を訪ねるといふ衝撃的なできごとの予兆となっている。

『懷硯』『近代艶隠者』とわずかな例しか挙げることができなかったが、西鶴にとつて、ホトトギスというのは、予想外の非日常への回路を開く鳥として認識されていたといえよう。

愛妻の死という非日常的な事件の哀しみを受容するために、西鶴にとつてホトトギスはなくてはならない鳥だった。西鶴は、百韻の虚空に、ホトトギスを自由に羽ばたかせ、存分に鳴かせることで、わが身に起きた宿命的なできごとを受け止め、仏に託し、そして、悲しみを鮮やかに創造のエネルギーに転化していったのかもしれない。

『俳諧の魔神』に睨まれるのも恐そうだし、『鬱屈した情感』を吐き出すというのものはた迷惑な話だから、こつそりひつそりと、ホトトギスの鳴き声を求めて耳をすましながら連句の世界を愉しむこととしよう。

## 事務局便り

◇男子袴一着本屋良子様からご寄付頂きました。

でに事務局にご連絡下さい。

事務局 式田恭子

☎・FAX 03-3498-0029

◇猫養基金にご協力有難うございました。

天の川連句会様 六千円

山寺たつみ様 五千円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通3376045

◇会費納入のお願い

猫養会の平成二十一年度年会費納入をお願い致します。

四月と七月の例会時に受付で申し受けます。例会に出席できない方は左記口座にお振り込み下さい。

猫養会 みずほ銀行新宿新都心支店

普通 3376088

◇新人会員紹介

平林香織 長野市在住

小津吉美(号睡心) 松阪市在住

◇猫養会総会

日 平成二十一年七月十五日(水曜日)

時 十一時より十七時(受付十時半より)

場所 江東区芭蕉記念館

江東区常盤一-六-三

電話03-3631-1448

総会終了後 歌仙興行

◇住所変更

風間克子

西東京市富士町1-7-69-308

◇「猫養作品集」第十九号が完成致しました。

一冊 二千円

左記へお申し込み下さい。

〒202-0012

西東京市東町4-4-28

鈴木千恵子

☎・FAX 0424-23-7817

◇右の正式俳諧のお稽古は

平成二十一年九月十五日(火)

江東区芭蕉記念館で行います。

◇猫養会名簿

平成二十一年度の猫養会会員名簿を作成中です。

住所変更・訂正が必要な方は、五月底ま

◇訂正とお詫び

前号に文字の誤りがありました。ここにお詫びして訂正致します。

十一頁 中段六行 カンテラ↓カンテラ

十一頁 中段十二行 白の鳩↓白鳩

十一頁 下段十七行

松田義文氏↓松田義男氏

季刊 『猫養通信』第七十五号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二-二-十一-十六

編集人 猫養通信編集部